

病理診断科

【概要】

適切な治療の基礎に適切な診断があり、適切な診断の要となるのが病理診断です。日々高度化する臨床サイドの要求に応えるべく、臨床医との緊密な意思疎通を図り、新たな疾患分類に即応し、免疫染色等の付加的手法を積極的に導入しつつ、正確で迅速な病理診断に努めています。

関連学会の認定状況としては、日本病理学会研修登録施設および日本臨床細胞学会認定施設として認定されています。

免疫染色においては、全自動免疫染色装置(ロシュ社)を導入しており、染色の安定性・再現性が図られ、乳がんでは、HER2、ER、PgR、MIB1(Ki-67)、胃がんではHER2 免疫検査をルーチン化して実施し、他にも、リンパ腫、中皮腫、転移病巣など鑑別診断、原発探求が行えるよう多くの抗体を保有し、診断に役立てています。大腸の RAS-BRAF、肺の EGFR、ALK、PD-L1、ROS1、BRAF、乳腺の HER2/FISH、多臓器における MSI など臨床より要望のある遺伝子検査は外部へ委託しています。

迅速組織診、迅速細胞診は、日中での数量は制限することなく実施、脂肪を含む凍結検体は川本法を導入し、薄切の品質を保つようにしています。また、手術症例他必要に応じて病変マッピングを行っており、臨床側から評価を得ています。また、週 1 回実施の呼吸器カンファレンス、月 1 回の乳腺カンファレンスに参加し、臨床との協働を図っています。

精度管理事業として、日本臨床衛生検査技師会、日本細胞学会、山口県臨床検査技師会等の精度管理調査に参加しています。他にも、多くの研修会や学会に参加するよう心掛けています。

リスクマネジメント対策として、部門システム (Dr ヘルパー、ひろぎん IT ソリューションズ) にある機能を活用し、臨床側が報告書を閲覧したかどうかを適宜チェックし、閲覧されていない報告は一覧表にして各臨床医に配布し、確認するよう促しています。来年度からは、紙面での配布に代わり、RPA(Robotic Process Automation、デジタルによる自動化ツール)を活用し、確認督促をメールで行えるよう準備を進めています。

ホルマリン対策としては、第 1 管理区分 (作業環境が適切であると判断される状態) であり、ホルマリン濃度は低値ですが、低レベルを維持するように常に改善を図っています。

【スタッフ】

常勤病理医 2 名：安田大成*1、半田瑞樹*2

臨床検査技師 3 名：山本美奈*3、川元博之*4、山田美和

【資格など】

*1	日本病理学会病理専門医、日本臨床細胞学会細胞診専門医
*2	日本病理学会病理専門医

*3	日本臨床細胞学会細胞検査士、日本臨床衛生検査技師会 厚生労働省特化物・四アルキル鉛等作業主任者、厚生労働省有機溶剤 作業主任者
*4	日本臨床細胞学会細胞検査士・国際細胞検査士 日本臨床衛生検査技師会認定病理検査技師 厚生労働省特化物・四アルキル鉛等作業主任者、厚生労働省有機溶剤 作業主任者

【病理業務】（令和2年4月～令和3年3月）

組織診（生検、手術）	1,684 例
術中迅速組織診断	117 例
細胞診	2,385 例
術中迅速細胞診	72 例
病理解剖	2 例

※ 新型コロナウイルス感染症の影響もあり、昨年度に比べ全体的に件数は減少しています。